

キング牧師没後50年 米国の公民権運動と銃規制

ジャーナリスト

三木寛郎

ロレイン・モーター

米国テネシー州メンフィスの南側、ダウンタウンとは程遠い寂れた通りに面して2階建ての建物がある。その名を「ロレイン・モーター」。その看板は今でも残されているが、内部は「公民権運動博物館 (National Civil Rights Museum)」として公開されている。

1968年4月4日の夕刻、公民権運動の父と言われるマーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師 (Martin Luther King, Jr.) が凶弾に倒れた場所である。宿泊していた2階・306号室の前で、夕食に出かけようとする矢先に向かいの建物から狙撃されたという。そこには場所を示す花輪が飾られ、内部には公民権運動の歴史を伝える様々な展示が行われている。キング牧師が宿

泊していた部屋は当時のままの姿が再現され、飲みかけのコーヒーカーップまでが置かれている。

1864年にノーベル平和賞を授与されたキング牧師であったが、1968年時点でも黒人であるキング牧師はダウンタウンの高級ホテルに宿泊することは叶わず、黒人経営の「ロレイン・モーター」がメンフィスでの常宿だったという。

常に暴力を否定し、万民の平等を訴え続けたキング牧師は、凶弾に倒れる2日前のスピーチで、死を予見させるような内容を語っている。

「何かが起きるかも知れない。ただ困難が多くある。しかし、それは私には問題ではない。私は山の頂上に立っているからだ。誰もが望むように私も長生きをしたいと思う。しかしそれは今の私にはどうでも良いことだ。(中略) 私は約束の地を見

た。そこにあなたたちと一緒にいくことは出来ないかもしれない。しかし、あなたたちには知っておいてほしい。私たちは約束の地に行くことができる。だから私は今幸せだ。何の心配もなく、誰も恐れない。私は神の栄光ある降臨を見たからだ」



死を予見させるような一節を含むこのスピーチは、1963年8月にワシントンD.C.で行った「私には夢がある」で始まる、かの有名な演説と並んで人々の心に刻まれている。

公民権運動今昔

キング牧師が凶弾に倒れてから50年が経過したいま、キング牧師が夢見たように「ミシシッピ州は自由と正義のオアシス」になっただろうか。米国は「子どもたちが、肌の色ではなく、人格の中身によって評価される国」になったのだろうか。

公民権運動自体が、そもそもは米国における黒人に対する人種差別を要因とするものであったが、時代が下り世界が狭くなった現代では、このキング牧師の思いは、単純に白人対黒人という構図に収まらなくなっている。

たしかに米国を訪れると、場所によっては根強い黒人への差別や偏見が見受けられる場合もあるが、それは甚だ時代遅れの感がある。いまやメキシコとの国境に壁を築こうという大統領が君臨する状況である。「アフリカ系米国人」という言い方

があるが、市民権を取得して米国に暮らす海外からの移住者の出身地はもはやアフリカだけにはとどまらない。アジア、中東、南米、世界中の場所から米国に来る人々がいるのだ。

たしかに黒人に対する差別の背景にはかつての奴隷制度があることはわかる。しかし今時合法的に奴隷が認められている国などありはしない。英国人ジョン・ニュートン（1725〜1807）は、もと奴隷船の船員だった。その船内における黒人に対する家畜以下とも言える扱いを実際に見て、そのことを悔い改めるべくアメイジング・グレイスの歌詞を書いたと言われている。

その昔ニュートンには奴隷市場が開かれ、奴隷たちはミシシッピ川に沿ってアメリカ各地に送られた。ニューオリンズは「新しいオルレアン」であり、デキシーランドは「フランスの10フラン紙幣が通用する地」の意味であり、ルイジアナは「ルイ14世の領地」という意味である。米国の奴隷制度にはフランスが深く関わっていたが、そのフランスが米国に贈ったのが自由の女神である。そこには「私にあなたの疲れと貧乏を委ねよ。

高波に揉まれ戻る祖国なき人々、動乱に弄ばれる人々、岸に打ち寄せられながら自由に呼吸する事を望む人々を私のものに送り給え。家なき人々のために

私は金色のドアに向けて灯火を掲げよう。エマ・ラザラス」と記されている。

米国は移民の国なのである。飢えや貧困から逃避して来る人もあれば、奴隷として拉致されてきた人もいる。そうした様々な人を包含して、移民の国なのである。新天地を求め祖国を後にしてきた人々、意思に反して強制的に連れてこられた人々を区別することも差別することもあるのではない。

銃社会につきまとう暗殺の影

公民権運動の父と言われるキング牧師が暗殺されたのは1968年、ロバート・ケネディが暗殺されたのがキング牧師と同じ年の11月、兄のジョン・F・ケネディ大統領がテキサス州ダラスで暗殺されたのが1963年、いずれも銃による暗殺である。キング牧師の公民権運動の遙か昔、奴隷解放を成し遂げたエイ

ブラハム・リンカーン大統領も暗殺された。

リンカーンは夜間に劇場で射殺されたが、ケネディ兄弟もキング牧師も凶弾に倒れたのは昼間である。銃社会米国では日常的に銃が生活のそばにある。暗殺とは名ばかりで、白昼堂々と銃が振り回される社会なのだ。

昨今でも銃社会アメリカでは銃を巡る様々な事件が後を絶たない。教育現場も然りだが、呆れたことに銃携行の教師にボーナス支給という大統領の発言まで出てくる始末である。





たしかに開拓民によって国の礎が築かれた米国ではあるが、果たして米国の象徴とも言える精神であるフロンティア・スピリッツとともに銃が社会に蔓延するのはいささか時代遅れだろう。

米国内には至るところに「マーティン・ルーサー・キング通り (Dr. Martin Luther King Jr Blvd)」がある。その数は1000近いと言われている。キング牧師の遺志は公式には広く受け継がれ、米国の社会に広く定着しているように見える。しかし、銃社会という観点から見ると、1968年の暗殺以降、どれほどの進化が見られるのだろうか。ト

ランプ大統領の動向を見ると、甚だ心もとない。

移民問題と公民権運動

米国における黒人の地位についてデータを見てみると、2017年12月の米国における失業率は米国全体で4・1、黒人の失業率は6・8%、白人の失業率は3・7%、アジア系は2・5%、ヒスパニック系は4・9%だった。圧倒的に黒人の失業率が高い(米労働省調べ)。貧困率で見ても、2017年9月時点で全体の貧困率は前年に比べて0・8ポイント低下して12・7%と改善されているが、白人の割合は8・8%。黒人が22%、ヒスパニック系が19・4%、アジア系が10・1% (米国勢調査局) となっており、貧困率でも黒人の割合は高い。

トランプ大統領の標的となっている移民の方が、じつは失業率、貧困率ともに黒人のそれよりもましな状況なのである。キング牧師の切り開いた黒人の人権確保は、まだまだ志半ばと言えなくもない状況である。

ロレイン・モーター(＝公民権運



動博物館)を取材した時、メンフィスの中心街にあるビル・ストリート歩いた。そこは黒人のミュージシャンが活躍するライブハウスの林立する通りだった。その時案内してくれた方のアドバイスは、通りの南端の繁華街が途切れるところから向こうにはいかないう方が良いというものだった。そこは貧困に苦しむ黒人たちの住居があるエリアなのだ。

一方、メンフィスの中心街から南に下ったところに「グレース・ランド」がある。キングとエルヴィス・プレスリーが建てた豪邸である。あたかも黒人のように歌う白人の青年だったエルヴィスは、巨万の富を築き、白亜の豪邸を所有したのだ。エルヴィ

スがここを手に入れたのが1957年のこと。それからおよそ10年後の1968年に、公民権運動の父として黒人の地位向上に奔走したキング牧師が町外れの黒人が経営する質素なモーターで暗殺された。

キング牧師の暗殺から50年、米国は本当の意味での公民権運動の成就と、銃社会の改革に取り組みなければならぬ時に来ているのだ。リンカーン、ケネディ兄弟、そしてキング牧師。凶弾に倒れた人々の遺志を再認識し、新しい時代の米国のあるべき姿を模索しなければならないのだ。

暗殺の悲しいニュースはもうたくさんである。